☆年間第4主日（1月31日）の聖書朗読☆※主任司祭からの解説があります。

第一朗読（申命記　１８章　１５-２０節）

モーセは民に言った。あなたの神、主はあなたの中から、あなたの同胞の中から、わたしのような預言者を立てられる。あなたたちは彼に聞き従わねばならない。このことはすべて、あなたがホレブで、集会の日に、「二度とわたしの神、主の声を聞き、この大いなる火を見て、死ぬことのないようにしてください」 とあなたの神、主に求めたことによっている。主はそのときわたしに言われた。「彼らの言うことはもっともである。わたしは彼らのために、同胞の中からあなたのような預言者を立ててその口にわたしの言葉を授ける。彼はわたしが命じることをすべて彼らに告げるであろう。彼がわたしの名によってわたしの言葉を語るのに、聞き従わない者があるならば、わたしはその責任を追及する。ただし、その預言者がわたしの命じていないことを、勝手にわたしの名によって語り、あるいは、他の神々の名によって語るならば、その預言者は死なねばならない。」

第二朗読 （使徒パウロのコリントの教会への手紙　7章32-35節）

皆さん、思い煩わないでほしい。独身の男は、どうすれば主に喜ばれるかと、主のことに心を遣いますが、結婚している男は、どうすれば妻に喜ばれるかと、世の事に心を遣い、心が二つに分かれてしまいます。
独身の女や未婚の女は、体も霊も聖なる者になろうとして、主のことに心を遣いますが、結婚している女は、どうすれば夫に喜ばれるかと、世の事に心を遣います。このようにわたしが言うのは、あなたがたのためを思ってのことで、決してあなたがたを束縛するためではなく、品位のある生活をさせて、ひたすら主に仕えさせるためなのです。

福音朗読（マルコによる福音書　1章 21－28節）

　イエスは、安息日に会堂に入って教え始められた。人々はその教えに非常に驚いた。律法学者のようにではなく、権威ある者としてお教えになったからである。そのとき、この会堂に汚れた霊に取りつかれた男がいて叫んだ。「ナザレのイエス、かまわないでくれ。我々を滅ぼしに来たのか。正体は分かっている。神の聖者だ。」
イエスが、「黙れ。この人から出て行け」とお叱りになると、汚れた霊はその人にけいれんを起こさせ、大声をあげて出て行った。人々は皆驚いて、論じ合った。これはいったいどういうことなのだ。権威ある新しい教えだ。この人が汚れた霊に命じると、その言うことを聴く。」
イエスの評判は、たちまちガリラヤ地方の隅々にまで広まった。

朗読解説　―主任司祭より皆様へ―

聖ヨハネボスコ司祭の記念日（サレジオ修道会の創立者）
　皆様お元気ですか。緊急事態宣言が出されて 3 週間がたちました。まだ感染が収まる気配がありませんので、最大限の注意を払って過ごしましょう。今日 1 月 31 日はドンボスコの記念日で、足立教会にとって大事な記念日です。足立教会はもちろん東京大司教区の教会ですが、サレジオ会に委託された教会です。また、教会の始まりもサレジオ会によって建てられました。歴代の神父様たちもこの教会を大事に盛り立ててくれました。感謝したいと思います。ドンボスコの精神は突飛なものではありません。すべてがイエスの教えから取られています。今日の主日にはもう一つの題が定められています。「世界こども助け合いの日」です。この日がドンボスコの記念日の近くにあることは場違いなものではなく、ドンボスコが青少年たちにどれだけ心をかけていたかがうかがわれるものではないかと思います。今日のミサはこのドンボスコの祈願を唱えながらドンボスコに青少年への使命を与えられたイエスに感謝を表し、現代の青少年への宣教の熱意を願いましょう。

第一朗読（申命記　１８章　１５-２０節）

この申命記はあのモーセが約束の地をヨルダン川の近くから眺めながら残した遺言のような形式をとったものです。主である神がモーセを通してイスラエルの民を導くために様々な掟や約束をなさり、それに従う限り約束の地にはいれることをモーセを通して語られるのです。そしてモーセの後に主である神のことばは預言者を通して語られるといわれたのです。つまり人の言葉を通して語られる神です。そこには人間に対する愛情と信頼があるのではないでしょうか。私たちは隣人を信頼し委ねることから、神への信頼、神への委ねを学ぶのです。隣人とのコミュニケーションは主である神とのコミュニケーションなのだと思います。

第二朗読（使徒パウロのコリントの教会への手紙　7章32-35節）

ここでは結婚の問題が出てきますが、事の発端は当時の初代教会の人々にとってイエスキリストの再臨が近いという考え方があったのです。つまり、この世のありさまは過ぎ去るから、この世のことで思い煩わないでないでほしい、というパウロ気持ちがあるのです。結婚の是非を言っているのではないのです。結婚して相手を思いやりながら主を喜ばせる生き方はあり、多くの人が実際そうしています。独身とか結婚生活とかどちらが優越しているのではなく、その立場において主である神に喜ばれる生活をすることが大事なのです。

福音朗読（マルコによる福音書　1章　21－28節）

福音の中ではよく安息日の話が出てきます。安息日というのはユダヤ人たちがこの安息日に会堂で律法を聞いたりその解釈を聞いたりして生活の基本を学んでいた日々だったのです。ですからイエスもその安息日での会堂の重要さはよくわかっていました。また人々もイエスがこの会堂でどのように父である神のことを教えるのか興味をもって待ち構えていたのです。当時の律法学者たちは自分が述べる解釈はだれだれ先生の教えだとか

述べていました。ですがイエスはそのようなことは一切言わず、自分の権威でもって述べていたのです。人々はその話し方に「新しい」権威を感じたのでしょう。イエスの言葉、話はイエスの心からの言葉、話なのです。私たちも神の話を人々にするときに、誰それの人の話として話すのでなく、自分の信念、心を話す必要があります。イエスはご自分が権威をもって話すことによって、権威の源がすでに来ていることを人々に知らせたかったのでしょう。イエスの覚悟を見た感じがします。

PS

2 月 17 日(水)は灰の水曜日です。そこから四旬節が始まります。昨年、受難の主日にいただいたソテツの葉が自宅にありましたら教会までお持ちください。また本日は「世界こどもの助け合いの日になっています。世界の子どもたちが等しく神様の愛を感じることができるように、寛大な献金をお願いします。

カトリック足立教会
主任司祭　野口重光